

久昌寺縁起（現代語訳）

（ ）は原注、「」は訳注または補足

尾張国丹羽郡稲木莊柳橋郷小折村にある嫩桂山久昌寺は当初、慈雲山龍徳寺と号していた。曹洞派下の練若〔寺院〕で、実峯良秀和尚の掛錫「僧侶が留まり修行をすること」の地である。歳月は移り、開基の年月は失しなわれたが、伝説では三百年前になるだろうか。文明明応の際、生駒左京進藤原家広が、父祖の墳墓の地ということで梵宇を再営し田畝を寄附した。生駒氏は摂政良房公（忠仁公と諡した）の末孫で大和国平群郡生駒郷谷口村を領有してそこに住んだ。生駒を称号とし、中世に至って流落し尾州に来て、丹羽郡小折村に住居を定めた。この時、郡郷は誰のものでもなかったので領地とした。子孫連綿と続き、家広に至って益々家声を揚げた。この後、龍徳寺の僧徒は亡くなり、曹洞宗としては断絶した。生駒加賀守豊政、同藏人家宗、関山会下〔臨濟宗妙心寺派〕の僧侶を招いて龍徳寺を取り仕切らせた。織田信長公がにわかに関勢を興し、尾州を平らげ城を同州小牧山に築いて本営とした。生駒家宗の娘を娶り、二男一女をもうけた。所謂、従三位左中将信忠卿、内大臣信雄公と徳川三郎信康の妻である。一日、信長公の妻が亡くなった。小折村の西で茶毘に付し、そこを新野の地と名づけた。龍徳寺で追善供養を行い、関山末派の僧が伊勢より来て龍徳禪刹に寄寓した。即ち火葬して久菴桂昌大禪定尼と号した。二株の若い桂が久しく昌えるという意味にならない、名を嫩桂山久昌寺と改めた。実に永禄九「一五六六」年丙寅のことであった。信長公は、常に妻を哀慕して、小牧の城楼に登り、遙かに西方を望んで、悲しみの涙を流し、歎き惜しみ続けたと云う。天正年中、関山派が沈落した。家宗の子八右衛門尉家長は海巖和尚を招いて久昌寺に住ませた。海巖は中島郡清洲城下の含笑寺に在った。通幻の法胤で天鷹の徒であった。海巖は尾州の人、佐々内蔵助成政（後に陸奥守に任ぜられた）の外甥である。家長とは膠漆の交りをした。海巖の学才が博洽であると世間では知られていた。海巖の師である含笑寺の住持、雄山和尚を久昌寺中興の開山とし、海巖は第二世となった。この時に臨濟宗という水流は枯れ、曹洞宗と云う山の蔭で「久昌寺は」栄えることとなった。信雄公が尾張伊勢を領有したとき、母公の遠忌供養として、丹羽郡五明村六百六十石の地を久昌寺の厨料に充てた。信雄公はその昔、小折の構営で生まれた。その氏神といわれるのは八代龍神の社である。家長は信雄公の外舅であった。家長は小折の城を領有し、犬山の城主織田十郎左衛門尉信清にかつては属した。岩倉城主織田伊勢守信安は犬山と戦いとなり、浮野に出兵し合戦となった。家長は小流を隔てて最先に鎗を合わせ、その敵を撃ち取った。小口の合戦でも、真つ先に斬込み、鉄炮に中り上脛を傷めた。その後、信長公に仕えることとなった。信長公は武功の士を撰び、黒角白角の冑を著けさせ、二十人を近習として侍らせた。家長は黒冑十人の一人である。濃州森部合戦には、家長は信長公の旗本として在陣した。先陣を心懸け、群れを離れて、先鋒 瀧川左近将監一益の部隊に加わった。一益の甥、瀧川儀太夫を頭として家長はかれらと共に進んだ。我が兵は散り散りとなったが、家長は残留して轡を回して進んだ。敵曾 長井甲斐守は馬を馳せ、家長

に出会う。鎧で家長は突き落とされたが、僕従が次々とやって来たので長井は家長を顧みることなく、我が陣へ駆け入り、そして戦死した。敵の鎧が家長の鎧に中ったが、その身を通すことはなかった。家長は長井を撃ち取れなかったのを遺憾とした。信長公が朝倉義景をめぐって進み、越前国金崎城を攻めた。家長は瞬間に進み、屏に附いたが矢疵を被った。信長公は、浅井備前守長政の江州小谷城を攻めた。城は堅固で落とすことが出来ず、兵を引いて帰った。浅井「軍」はその弊に乗じたが、佐々内蔵助成政が殿後として備えた。家長は成政と睨じかつたので、旗本から選抜して協力した。敵は急進してきたが、家長も応戦すること度々、敵を払いのけた。それに浅井は辟易した。成政は兵を収め事実を告げた。信長公は大いに褒賞を与えた。当時の人もまた、その勇武を知った。信雄公は小折營を修復し、内に楼櫓を高くし、外に湍塹「堀」を浚くした。それを家長は賜った。天正甲申十二「一五八四」年、信雄公は羽柴秀吉と確執が生じた。秀吉は濃州より入って尾州に侵攻した。東照神君「徳川家康」は信雄公を援け、小牧の旧壘に駐屯して対峙した。小折の城は犬山と境を接している。両君は小折に到り、村はずれの良「北東、鬼門」の隅にある富士塚に往き、敵陣の様子を上から見極め、又城楼に登って巡視した。この時、家長は勢州河内城（今、長嶋と曰う）を守っていた。この地は信雄の腹心の地であって、常にここに居た。今、尾州に出陣中である。「信雄は」この城の警衛がいなかったので、家長に守らせた。小折の城は家長の次男 伝三郎善長（後に右近と号す）がこれを守った。信雄公は佐久間甚九郎正勝（後に駿河守と号し、剃髪して不干と曰った）と、鉄炮隊長の青山新七郎を番兵として、城内に配置した。天正十八庚寅「一五九〇」年、信雄公は、わけあって改易され、多くの家臣が流落した。秀吉公はそこから人を択んで、自身の家臣とした。家長も秀吉公に仕え、本領を安堵された。五郎八利豊は家長の季子「末っ子」であった。海巖和尚を師匠にし、文字を習い、書籍を読み、和歌を学んだ。天正十八年庚寅、小田原の役に父と共に信雄公に従軍した。時に十六歳。同年、関白秀次公に仕え、奥州平定の陣に付き従った。同十九年辛卯十一月廿八日、従五位下に叙され隼人正に任じられた（上卿の中山大納言が叙任を決定し、藏人頭右大弁藤原頼宣がそれを伝えた。この時、豊臣宗直と号し、後に長知と改め、藤原姓に戻した。又、利豊と改め、その官名も亦、大炊助と改め、後には因幡守と改めた）。秀次公の事件の後、姻家の好みに依って「利豊の姉が蜂須賀家政の正室」、蜂須賀阿波守家政（後、薙髪して蓬菴と号す）は、利豊を呼び寄せ、「利豊も」ほどなく往くことにしていた。父の家長が、采地を利豊に譲り与えたので、小折に住んだ（家長の嫡子 平蔵は早世し、その子 平三郎は幼いときから秀信卿に仕えた。家長の二男 右近善長は信雄に従い、配所に居た。三男 与三左衛門は年若くして死んだ。それで四男の利豊が嗣となった）。毎年一度、尾張国土らと大坂に行き、「秀吉に」拜謁した。慶長五庚子「一六〇〇」年、石田三成が秀頼公を囲って挙兵し、天下は乱れた。福島左衛門大夫正則は、神君に従い、東へ向った。「福島は」利豊に謂った。西国で変が起これば、正則の居城清洲に籠城してくれ、と。利豊はこれを謹んで承けた。織田秀信卿（信忠卿の子、濃州岐阜城を領有するので、岐阜中

納言と曰う)、三成に与した。秀信卿は、利豊父子に配下に入るよう再三要請してきた。父家長は、信忠卿は親戚なので秀信卿を捨て去り難く、その要請に随い、兵を率いて小折宮に赴こうとした。利豊はかたくなに約束を守り、清洲城に入って守った。正則は尾州に帰り西濃に向う。利豊も同行し岐阜城を攻めた。その時、先駆けして七曲を登り城中に入った。九月十五日、関ヶ原合戦に福島の先鋒隊として進軍し、宇喜多秀家の陣へ向った。利豊は馬より下り鎧を提げ敵に一町余近付く。敵兵に、金の切団うちわに猿の毛で縁を縫った指物を背負い、鉄砲隊を指揮する者がいた。利豊は、この士を撃とうとして馬を馳せ急に山を登る。この士は、山の尾根を伝い逃げた。利豊もこれを追った。我が兵二人が後を慕い付いて来る。利豊は他に手柄を立てよう思い、この士を棄てて宇喜多の本陣に駆け入った。歩卒一人が刀を抜いて向ってくる。利豊は鎧で突倒した。小坂助六が左の方からやって来た。敵兵で黒鎧を着け、浅縹あさぎの中で頭を裏うらんだ士が丘の上より走り下り、一鐘に小坂を馬より突き落とした。利豊は鐘を掉ってこの士を突き伏せ、その首を取った。これが秀家の近士隊曾(これを小姓頭と謂う)足立勘十郎であった。此の日、利豊の従兵は敵の首を四級獲った。福島正則の口添えで今日獲った首級を神君に献じた。この戦いで大勝し、天下は神君の手中に入った。これより大津へ「家康は」遷られ、福島正則及び尾州の士たちは山科醍醐に陣をはり、利豊も同陣した。十月、神君は大坂城西の丸に移った。福島正則と共に拝謁し、尾州の士たちは帰国した。同冬、利豊は歳末の祝いとして尾州より綿衣二領を献じた。西尾隠岐守吉次がこれを神君に申し上げて御書を賜わった。翌年春、大坂へ行き、神君に拝謁した。下野守忠吉卿は利豊を家臣にしたい、と願い出た。神君はこれを允ゆるした。忠吉卿が尾州の主となったことで利豊は「引き続き」小折に住んだ。「その後」義直卿が尾州を治め、神君の鈞命で「利豊は」義直卿に仕えた。大坂冬・夏の両陣に従軍して竹腰山城守正信の部隊にいた。五月七日、自軍の戦列が乱れた。利豊は一步も退かずに進み、馬で城中に乗り込もうとしていた。山城守正信は陣を張り、先に進もうとする者を制止したので、利豊も戻り、正信と共に隊伍を乱した兵たちを集めた。利豊は十六歳より熱心に禅の修行に打ち込み、玄要を悟ろうとしていた。二十三歳、海巖和尚の指導の下で反省し修行していた。利豊の妻は津田藤右衛門の娘である。津田は、織田の門葉で代々同州春日井郡小田井城主としてその名を知られていた。信長公直属の家来であったが、引き続き信忠卿にも仕えた。利豊の妻が亡くなり新野郎、久昌寺の西郊に葬った。新野の経塚・長塚は皆茶毘の地である。海巖は、場所をよくみて久昌寺の塔頭を移動してその地「を墓所」とした。寺裏に塔頭を移した。関山下の新蔵主の居た所である。久昌寺の厨料は、秀吉公の時、文禄四年九月二十一日、先例の如く残すべしとの「朱」印「状」を賜った。慶長一統の後、伊奈備前守忠政が尾州を檢地した時、久昌寺領は減らされ、五明村の内、二百石を授かった。同六年五月廿日、忠吉卿も朱印を下され、義直卿も慶長の例に従い、元和六年九月初日、印章を下された。海巖和尚は同州那古野城下万松寺に移り、その法弟明谷和尚は、久昌寺が万松寺の天鷹の後、大雲和尚の淨刹であることを知った。海巖は又、越前永平寺住職になった。先例に依って、明

谷が万松寺・久昌寺を取り仕切った。数世住職が替ったが本寺の規箴いしましめはなかった。海巖は万松寺の主となり、明谷が相続した。それゆえに「久昌寺が」万松寺の末寺となったのである。明谷は久昌寺を宗訓に委せたが、僧侶になってからの年数が浅かったので宗寿和尚が寺を監督した。宗寿は、邪で道理を弁えず僧律に拘らなかつたので、元除和尚を攘はらい斥け、これに代った。盟約では、宗訓が転衣の時、住職を譲るべし、とあつた。紙に認め、利豊に差し出していた。元除は前盟に違い同意を与えなかつた。明谷が入滅した。宗訓は怒つて衣鉢を還し、江州西明寺に登り、寂室和尚の弟子となつて名を空子と改めた。元除は酒に溺れ、寺法は失われた。利豊は往日の盟約に従い、元除を隠居させ、宗訓を住職にしようとした。元除は辞遜の志もなく、宗訓も亦、寺門に帰らなかつた。殆ど傾いて斜めとなり、法水はいよいよ減り無くなるうとしていた。利豊には以前から元除を追出そうとしていた。万松寺現住の陽穀和尚及び洞山派の僧侶たちが利豊の元を訪れ謝罪した。利豊は憤りを抑えて元除を止まらせたが、いまだその過ちを改めることはなかつた。利豊はこれを見るに忍びず、正保四丁亥「一六四七」年、元除の罪悪を書いて訴へた。寺尾越前守直政（後に土佐守と改む）が義直卿に報告した。御意向は、先祖から受け継いできた寺院は檀越が裁断して、寺僧はこれに背いてはいけない、寺僧が檀越に随わぬのであれば、その罪は重い、早くその僧を追出すべし、と云うものであつた。越前守及び山下乡正氏紀、松井三郎左衛門吉英（二人は那古野城の留守居で、国務を預かる）たちは、この論を伝えた。利豊は元除を黜しりぞけ、邦君に願ひ出て、久昌寺の租税で梵宇を修補し、新たに方丈を建てた。僧房衆寮悉く備つた。又、同村桜雲山常観寺地藏堂を造成し、常観寺は久昌寺の末寺となつた。本尊は尾州の六地藏の一員と称えられてきたものである。久昌寺の鎮守には神明社を勧請した。寺の西辺に在つて遠く林の中に分け入らなければ参拝できなかつたので、寺の東北に場所を決め、改めて神祠を移した。その旧址に茆宇ぼううを結び、塔頭とし、松向山了桂院なつと号けた。久昌寺の梵鐘は明応六「一四九七」年丁巳十二月に造られ、左京進家広が願主であつたが、長い年月を経てきたので破毀した。利豊の姉は奥州岩城郡主 鳥居左京亮忠政の妻である。忠政卒後、落髪して宝寿院と号し、京師に住んだ。父母の孝養のために鳧鐘つづを久昌寺に寄進した。昔の破鐘も同に鑪中に入れ、鑄直した。那古野城下にある瑞雲山政秀寺の徹源和尚がその銘を為つた。徹源は槐山和尚の法嗣、悟溪の流れを継ぐ人である。利豊は年老いて私舎に退隱した。男 大膳利勝むすこ（後に因幡と号す）が、その後を継いだ。慶安年中、利豊は薙髪して自ら名を空山露月居士と名乗つた。小折村東北に法頂寺があり、薬師仏を安置していた。その地は絶景で言葉に出来なかつた。居士は廟地を森陰に構え石を疊ねて納骨の場所とした。淨瑠璃尊を大雲山般若寺の東鼎に移し、一堂を建てそこに大切に祀つた。般若寺は元々真言宗の道場であつた。人里を遠く離れ人影もまばらであつた。妖怪がいて往来の庶民を悩ましていた。或る時、生駒氏が寺前を通り過ぎた。妖怪と出遇い、刀を抜いてすぐさま、これを斬つた。妖怪は逃げ散り、翌日これを見ると、石の五輪塔が斫り裂かれていた。この刀は濃州関の鍛工 禅定兼吉の製作である。刃は少し闕かけたが、数年の後、その

闕けた部分が自然に愈えて刃は故のようになっていた。生駒氏は五輪丸と名づけ珍蔵し、今に現存している。般若寺の密教宗派は分散し、関山派の僧侶をこれに居へ、久昌寺と居士とに従った。久昌寺の経営は、寺院を落成したけれども主がいなかった。密かな思ひは曹洞宗の断絶で、その時がやって来た。久菴の古を慕い、「関山」慧玄会下になろうとしていたが未だ果たせていない。居士はそれで石川伊賀守正光に頼み、邦君光義卿に申し上げた。「光義は」家臣に検討させた。正光は竹腰山城守正晴、成瀬信濃守正親、志水甲斐守忠継及び万松寺の九峯和尚の意見を交互に評論し、趣旨を述べた。光義卿は次のように仰った。久昌寺は、中年、関山派の僧が寺院に住み、その号を改めたけれども始まりは曹洞宗の紺苑「寺院」である。出自を根拠とすれば先を争うてまで他に変わる必要があるだろうか。過去を捨てて未来を取ることもまた、良いことではない。且つ又、檀越が古にもどして住持を決めれば、本山が争つて妨害するのではないか、洞山派下の名緇「名僧」を選んで居くのがよい、と。利勝はこれに恭順し、居士も謹んでその旨を承った。近邦の苾芻「僧侶」を撰び、決心和尚「の返事」をつつしんで待った。決心は勢州龜山城下の宗英寺に住んでいた。家臣にたのみ誠実さを示し、龜山城主に相談した。決心は承諾した。利勝は決心を迎接して院に入れた。万松寺に往き本末の規則を為った。決心は、又、三州豊川妙巖寺を管理した。一仲和尚は篆居を視てまもなく院を退いた。随岩和尚も堂を開いた。寛文七「一六六七」年二月十七日、光義卿は慶長元和の例を従い、寺領の黒印を与えられた。同十「一六七〇」年庚戌四月廿六日、居士は逝去した。享年九十六歳。日頃の訓告により石櫃に納め、法頂寺の森下に瘞めた。居士の志したのは入定であった。末の世にこの事を聞いたことがないので、輟めになつた。利勝は葬礼をし、久昌寺に弔意の贈り物をした。嗚呼、居士の長生、近年このような方はいない。筋骨形軀は衰えていない。それで長生きしたといつてよいであろう。久昌寺を復旧し外観を改めたのは、居士の力である。久昌寺が洞山に入ったのは運命であつたのか。そもそも久昌寺の沿革は一々記すことは難しい。実峯和尚が開基であつて後、慧玄の弟子らが居た。曹洞の門葉も亦、長く絶え間なく続いてきたのはこのようであつた。バラバラに分裂崩壊してきたので、牌板「位牌」は削り取られ、石碑を打ち捨てられた。生駒氏累代の命日、過去帳は泯滅して知る者はない、惜しいことだ。久昌寺の末寺はそれほど多くはないが、或るものは他宗に変わり、或るものは寺名を換え、今に残っているものは、わずかに七寺である。

常観寺、般若寺、瑞龍寺、了桂院

右四箇寺は小折村に在り、

道音寺

同州丹羽郡五明村に在り、

稻源庵

同郡石仏村に在り、

常昌寺

同州春日井郡西嶋村に在り、